

## 「パレスチナの慟哭」

2014年07月16日

イスラエル軍のパレスチナ自治区ガザへの空爆は残虐である。死傷している子どもたちの映像は見るに耐えない。兵器の差は歴然とし、大人と子どもが向き合っているような戦争である。地上軍を投入するとも言われている。当事者同士が戦い続けると言い、国連も手出しできない状態である。被害はまだ広がっていくのではないか。

国際政治の力学の中で、1948年にイスラエル国家が樹立した。エルサレムの滅亡から1,900年後に国家が再建された。世界を放浪してきたイスラエル人が故国を持った驚くべき出来事であった。再建後は、米国の支援を受け、軍事強国として、先住のパレスチナ人の生活基盤を奪い、追い出してきた。その差別、抑圧は世界の悲しみになった。

教会でツアーを組み、イスラエル旅行に行った時、旅行会社にパレスチナ人教会に行きたいと申し出て、ベツレヘムのルター派教会を訪ねることができた。パレスチナ人居住区は道路が整備されてなく、道幅は狭く、信号も少なかった。運転手は交差点で、互いにひっこめと大声で怒鳴り合っていた。訪ねた教会は地域のセンターの役割をしている大きな教会だった。ミトリ・ラヘブ牧師に会い、短い時間ではあったが、話を聞くことができた。パレスチナ人のクリスチャン人口は7~8%くらいだそうだが、ラヘブ牧師は、主イエスの宣教以来、この地で2,000年にわたって信仰を継承していると誇らしげに語っていた。

彼は『私はパレスチナ人クリスチャン』という本を上梓している。日本語訳も出て、苦悩と夢を感銘深く読んだ。著書に、米国のキング牧師に倣い「私には夢がある」と書いている。「私には、相互に平和に隣り合って住み、無為に費やされるだけの武器に莫大な資源を浪費する必要のない二つの民の夢がある。(中略)双方ともが、自由に使えるすばらしい才能と可能性を持っている。もし二つの民が自分たちの科学的努力を結集させるのであれば、それは中東にとってなんという祝福となることだろうか！ここにどれほどの経済的強豪が建設されることだろうか！ここにあらゆる国民をひきつける、どれほど魅力的なオアシスが作れることだろうか！」続いて、旧約聖書のミカ書4章3節「主は多くの民の争いを裁きはるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」の聖句を引用している。ラヘブ牧師が来日し講演会が持たれた時、聞きに行った。イスラエル軍の攻撃で壊された窓ガラスを、可愛い天使に作り替えて、資金作りをしていたので、買って帰った。

イスラエルのパレスチナ攻撃は人ごとではなくなった。安倍政権は4月、武器輸出三原則を撤廃した。イスラエルに輸出される日本の武器によって、パレスチナ人を殺傷し、加害者になる可能性が出てくる。沖縄県民は基地提供によって、ベトナム戦争に加担したと苦しんできた。集団的自衛権が絡んでくることも考えられる。日本はパレスチナを国家として認め、支援をしてきた。イスラム圏では、日本は信頼されていると言われている。武器輸出や集団的自衛権によって、信頼を損なうと、イスラム原理主義者が日本をテロの標的にすることもあり得るのではないか。

狭い地域に閉ざされ、空爆の死に晒されているパレスチナの慟哭を聞く者はラヘブ牧師の夢を、また預言者ミカの言葉の実現を願う。